

No. (19) 平成 30 年度 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業成果報告書

事業名称	新宿から発信する「国際演劇都市 TOKYO」プロジェクト		
実行委員会	新宿から発信する「国際演劇都市 TOKYO」プロジェクト実行委員会		
中核館	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館		
	住所	〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1	
	TEL	03-5286-1829	FAX 03-5273-4398
	ホームページ	https://www.waseda.jp/enpaku/	
構成団体	新宿区地域文化部文化観光課、新宿区教育委員会事務局教育支援課、公益財団法人新宿未来創造財団、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館双栴会(ボランティア組織)、新宿フィールドミュージアム、新宿観光振興協会		
事業開始時点の課題分析	<p>本事業の中核となる早稲田大学坪内博士記念演劇博物館は、1928年10月に坪内逍遙を中心に各界有志の協賛により設立され、今秋、創立90周年を迎える。創立以来、日本はもとより、世界各地の演劇・映像に関する貴重な資料を収集・保管・展示し、近年はこれらのアーカイブを積極的に公開することで、文化資源の共有化を大胆に図っている。1987年には、建物が新宿区有形文化財（建造物）の指定を受け、アジアで唯一の演劇専門総合博物館として、演劇・映像文化の普及に貢献するとともに、国際的な研究拠点としても重要な役割を果たしており、海外の研究・教育機関や博物館との交流も積極的に行ってきた。2017年には、前年に当館で開催した「あゝ新宿 スペクタクルとしての都市」展の成功を踏まえて、株式会社新宿高野による会場の無償提供を得て、新宿区や新宿観光振興協会、新宿歴史博物館等地域の行政や諸機関と連携し、新宿の中心地で「あゝ新宿」展第2弾を開催した。演劇・映像・音楽など広範な新宿文化の歴史と将来の展望を豊かに示した本展は、新宿区内のみならず国内外から多数の来場者を集め、SNS等でも大きな話題となった。また、過去9年間にわたり本補助金で実施してきた伝統芸能体験講座やこども映画教室、こども演劇教室、新宿文化や日本の伝統芸能に関するシンポジウムや公演、体験型展示や展示の多言語化事業によって、地域の活性化や観光振興、教育や人材育成にも寄与してきた。どの事業も参加者から好評を得て、大きな成果を上げている。</p> <p>今後は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、53,000人の学生を擁する早稲田大学という教育機関内の組織であることや、新宿区という立地条件により若年層および広く一般の来場者が期待される当館の性格を踏まえ、中核館として国際的な発信力をさらに強化すると同時に、地域との連携をより強固なものにしていきたい。国際社会における「国のイメージ」の重要性が増大するなか、海外で評価が高く、日本の重要な文化の一つである演劇・映像文化の魅力を世界に向けて広く発信することによって、日本の文化全般あるいは日本という国そのものへの興味・理解を喚起するとともに、国際交流の推進にも寄与したい。それは日本の演劇・映像文化に対する国内の意識を高め、日本人自身その魅力を再発見・再認識することにもつながるだろう。2020年以降をも見据えつつ、演劇・映像文化による地域振興および観光振興、地域文化の国際発信と国際交流、さらに人材の育成を通じて、文化芸術立国の実現に資することを目指す。</p>		

<p>事業目的</p>	<p>本事業の目的は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会とその先を見据え、国際的にも非常に高く評価され、国内においても「海外に発信すべき日本のブランド力」として認知されている日本の演劇・映像文化を、周辺地域との共働によって、新宿から広く国内外に向けて発信することである。本事業は、中核となる演劇博物館が長年にわたって蓄積してきた膨大な文化資源やアーカイブの活用はもとより、演劇公演やワークショップ、アウトリーチ活動、多言語発信など多彩な手法により、演劇・映像文化の魅力を国内外に向けて豊かに発信し、地域文化の活性化のみならず、演劇文化全体の底上げを狙う点に特色がある。</p> <p>まずは、新宿区およびその周辺に居住する児童・生徒・学生・外国人を含めた地域住民らに、古典芸能から現代演劇、映像にいたるまで、多様な文化に触れてもらうことによって、文化的関心を喚起し、地域の文化を活性化するとともに、未来の文化の担い手となる人材を育成する。また、訪日外国人に対する展示の多言語対応を充実させ、文化財本来の魅力や価値を分かりやすく伝えられるような環境を整備することで、外国人利用者のより一層の増加を促進する。さらに、周辺地域および関係機関との緊密なネットワークを構築し、日本の演劇・映像文化の多様かつ普遍的な魅力を国内外に広く発信することによって、オリンピック・パラリンピック競技大会の機運醸成や訪日外国人観光客の更なる拡大などを見据えつつ、インバウンド観光を促進するとともに、国内の観光振興施策とも連携し、地域振興・観光振興に大きく貢献する。地域との共働による文化活動や演劇・映像文化の普及と発信、地域文化の担い手の育成や多様な対象者のための学習講座の実施、障がい者への芸術活動・鑑賞活動支援、多言語対応や海外の博物館との交流・共同作業などを積み重ねることで、新宿から「国際演劇都市 TOKYO」を強くアピールするとともに、演劇・映像文化を通じて、災害復興や環境問題、少子高齢化や福祉といった、地域の社会問題であると同時に、世界共通の課題についても、国内外の人々と共に考え、共感を深める場を創出したい。</p> <p>なお、事業の実施にあたっては、演劇上演に力を入れている豊島区やオリンピック・パラリンピックに向けて文化事業を活性化させている文京区など新宿区を中心とする近隣地区の文化施設と連携、共働することによって、地域の文化施設・発信拠点をつなぐ中心的な役割を担い、演劇・映像文化を核とした地域振興・観光振興を長期的に継続するためのネットワークを構築する。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、演劇博物館を中核として、新宿区、新宿区観光振興協会、新宿区未来創造財団をはじめとして、新宿の行政・観光・文化を担う主要機関のメンバーからなる実行委員会を組織し、新宿から「国際演劇都市 TOKYO」を国内外に広く発信するために、次の事業を行うものである。</p> <p>1. 「『演劇の街・新宿』振興事業」では、国際的なマーケットでも非常に評価の高い、最先端の現代日本演劇文化に様々な形（演劇を使った街歩き、文化財での演劇公演、講演会、ワークショップ）で触れ合う機会を提供し、演劇に馴染みのない観客にも現代日本演劇の魅力を伝えることで、演劇文化の普及を図るとともに、観光資源としての劇場・演劇文化の利活用を促し、演劇を利用した地域振興策を発信することによって、地域振興・観光振興に貢献する。</p> <p>2. 「地域のこどもたちに演劇文化を継承し次世代の担い手を育成する人材育成事業」では、学校教育では十分に取上げられることのない演劇の実践的経験および鑑賞の機会を提供することで、こどもたちの豊かな感性や情操、知的好奇心を刺激し、クリエイティ</p>

	<p>ブな発想力・表現力、そして主体的・対話的で深い学びの力を培うとともに、演劇文化への関心を高め、未来の地域文化の担い手を育成する。また、特別支援学校への伝統芸能アウトリーチ活動では、障がいをもつ子どもたちに鑑賞と体験の機会を提供する。</p> <p>3. 「グローバル化拠点としての演劇博物館の国際発信事業」では、海外からの来館者に向けて、英語・中国語・韓国語を中心に多言語で解説する「展示解説の多言語化事業」と、海外の博物館との相互連携および文化財の新たな保存・活用における知識や技術を広く共有する「海外の演劇博物館との知識・技術交流事業」によって、地域のグローバル化拠点として、演劇・映像文化の魅力を広く国内外に発信する。</p> <p>4. 「多様な演劇文化の普及を目的としたユニークベニューとしての演劇博物館促進事業」では、本補助金によって継続して実施してきた二つのイベントを、地域の文化ボランティアや学生ボランティアと協力して開催することで、地域とのより緊密な共働を実現し、学生などの若い世代や地域住民への伝統文化の普及と浸透を図る。また、新宿区有形文化財である演劇博物館の前舞台や展示室、重要文化財である大隈記念講堂を活用することによって、演劇・映像文化による地域コミュニティーの形成を促進するとともに、その中核的な役割を担う。</p> <p>演劇・映像文化による地域振興・観光振興、人材の育成と障がい者支援、展示解説の多言語化と演劇・映像文化の国際発信、地域との共働による伝統文化普及と地域コミュニティーの形成、いずれの事業も2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会とその先を見据え、継続性を担保しつつも、発展性および新奇性を重視し、全国の美術館・歴史博物館および他の地域のモデル事業となることを目指す。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携 ■イ ユニークベニューの促進 ■ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館 ■エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信 <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成 □イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発 ■ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施 ■エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業 <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動 □イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発 <p>1. 「演劇の街・新宿」振興事業</p> <p>(1) 演劇による地域の観光資源活用プロジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> ①演劇を使った街歩き：『演劇クエスト 花の東京大脱走編』冊子の作成と配布 ②文化財での演劇公演：ゲッコーパレード『リンドバークたちの飛行』 ③事前打合せ・開催準備 ④地域広報・ホームページでの情報発信

⑤アンケートの実施

(2) 演劇文化発信プロジェクト

①トークショー：「逃げる劇作家、岩松了を追いかけて。」

②事前打合せ・開催準備

③地域広報・ホームページでの情報発信

④アンケートの実施

(3) 演劇で社会問題を考えるプロジェクト

①ワークショップ：「老いと演劇のワークショップ」

②事前打合せ・開催準備

③地域広報・ホームページでの情報発信

④アンケートの実施

2. 地域のこどもたちに演劇文化を継承し次世代の担い手を育成する人材育成事業

(1) こども向け演劇ワークショップを通じた演劇人育成プロジェクト

①演劇創作ワークショップ「こども演劇教室」の実施

②事前打合せ・開催準備

③地域広報・ホームページでの情報発信

④ヒアリングの実施およびホームページ等での成果発信

(2) アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の伝統芸能鑑賞支援活動

①特別支援学校での伝統芸能ワークショップ「出張体験教室（狂言／常磐津）」の実施

②事前打合せ・開催準備

3. グローバル化拠点としての演劇博物館の国際発信事業

(1) 展示解説の多言語化事業

①展示解説パネルの多言語化

②ホームページの展示案内の多言語化・国際発信

③事前打合せ・開催準備

④QRコード利用回数調査

(2) 海外の演劇博物館との知識・技術交流事業

①国際交流シンポジウムの開催

②事前打合せ・開催準備

③地域広報・ホームページでの情報発信

④アンケートの実施

4. 多様な演劇文化の普及を目的としたユニークベニューとしての演劇博物館促進事業

(1) ユニークベニューとしての演劇博物館活用プロジェクト

①野外映画上映会「エンパクシネマ vol.2」の開催

②事前打合せ・開催準備

③地域広報・ホームページでの情報発信

④アンケートの実施

(2) 若年層のための伝統文化継承プロジェクト

①落語会「日本演芸若手研精会 in 早稲田」の開催

②事前打合せ・開催準備

③地域広報・ホームページでの情報発信

④アンケートの実施

1. 「演劇の街・新宿」振興事業

(1) 演劇による地域の観光資源活用プロジェクト

①演劇を使った街歩き：『演劇クエスト 花の東京大脱走編』冊子の作成と配布では、これまで横浜、城崎、マニラ、デュッセルドルフ、安山、香港などで実施されてきた、都市を探検する遊歩型ツアープロジェクト『演劇クエスト (ENGEKI QUEST) 』を、初めて東京で開催。冊子を作成し、期間中に 2000 部を配布した。参加者は、東京さくらトラム（都電荒川線）沿線を舞台に、「冒険の書」を手に、「未知の街」をさまようことで、人びとの生活や都市の歴史、過去の亡霊と遭遇する。「演劇とロールプレイングゲームの要素が混ざり合い、とても楽しめました」、「街の新たな一面を発見できました」、「地域の歴史や生活を新たな視線から見ることができました」と、体験者からは好評をもって迎えられ、このプロジェクトによって演劇の楽しみを提供するだけでなく、参加者を周辺地域へと誘導し、地域振興にも貢献することができた。また、前述の通り東京では初の実施となり、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、一つのモデルケースにもなったのではないだろうか。

②文化財での演劇公演：ゲッコーパレード『リンドバークたちの飛行』には、定員 60 名の募集に対して 263 名の応募があり、当日は関係者も含め 66 名が参加した。さまざまな専門を持つ 6 人の演出家が展示室ごとに異なる趣向を凝らし、参加者はリンドバークとともに部屋を巡り冒険の旅に出る。リンドバークが大西洋横断飛行を成功させたのは 1927 年。新宿区有形文化財でもある演劇博物館が設立されたのは翌 1928 年。戯曲と時代を共有する建物内で、現在と過去、日本と欧米。二つの時間、二つの場所が交錯した。来場者からのアンケートには、「実際に舞台となる演劇博物館の 1 階から 3 階、そして館外へと役者と観客が移動しながら芝居を体感する試みは斬新でした」、「このような形での演劇があるとは思ってもいなかったのも、とても楽しめました。大変貴重な経験となりました」、「古典作品が場所と俳優の力で、新たな息吹が生まれる様子を体験できた」、「保護の面で難しいかもしれませんが。ほかの博物館もパフォーマンス会場としてもっと活用してほしいと思います」といった声が寄せられた。演劇が建築や歴史とどのように関わることができるのかという一つのモデルを提示するとともに、演劇公演による集客を通じ、演劇博物館が周辺地域への人の流れを作り出す起点となることで、地域の観光振興に寄与できたことは、博物館としての当館の今後の可能性も含めて、当事業の大きな成果といえるだろう。

(2) 演劇文化発信プロジェクト

①岩松了×風間杜夫×坂井真紀トークショー「逃げる劇作家、岩松了を追いかけて。」には、定員 1000 名の募集に対して 1054 名の応募があり、当日は 569 名が参加した。インフルエンザの流行と冷たい雨の影響もあり、当日キャンセルも少なくはなかったが、現在の日本の演劇シーンを決定的に方向づけた「静かな演劇」、そのパイオニアであり、30 年以上も先頭を走り続けながら、まことしやかな解説や体系化から、しなやかに身をかわしてきた岩松了氏の、言葉を重ねるほどに謎が深まり、謎が官能を濃くする唯一無二の劇世界を、ご本人と、岩松戯曲を体現してきた風間杜夫氏、坂井真紀氏とともに紐解く、とても魅力的なトークショーとなった。来場者からのアンケートには、「3 人の役者それぞれの特異性と共通性が興味深かった」、「稽古や戯曲に対する役者さんたちの正直な心のうちをきけるのは貴重な体験であった」と役者の生の声を聴けた喜びとともに、「最近では現代演劇に触れる機会がなかったので、興味深く拝聴させていただきました」、「岩松さ

施後の
成果・効果等

ん、風間さん、坂井さんが本当にステキで、芝居がみたくになりました」、「岩松さんの作品がとてもみたくになりました」といった声も多く寄せられた。認知度の高い著名人によるトークショーを実施することで、演劇に馴染みのない層にも、現代日本演劇の魅力を分かりやすく伝え、この事業をきっかけに地域の劇場や文化施設に積極的に足を運んでもらうことができた。今後も演劇文化の継続的な利活用を促し、地域振興・観光振興を推進することで、地域全体へのさらなる効果が期待される。

(3) 演劇で社会問題を考えるプロジェクト

①「老いと演劇のワークショップ」には、定員 25 名の募集に対して 147 名の応募があり、当日は 25 名が参加した。「老人介護の現場に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを」というコンセプトのもと、高齢者や介護者と共に作る創作上演、認知症ケアに演劇的手法を取り入れたワークショップを実施する、「老いと演劇」OiBokkeShi。今回のワークショップでは、演劇を通じて、認知症の人が見ている世界や高齢者が歩んできた人生に想像力を働かせ、“いまここ”を共に楽しむコミュニケーションを追求した。参加者からのアンケートには、「演劇と介護という新しい視点を発見できました」、「演劇と老い、介護の意外な相関性を知ることができてよかったです」、「介護に限らず、日常において大切なことを気づかせてくれるワークショップでした」、「演劇の役割・社会的意義をこんなふう楽しく、言葉にできるというのが素晴らしいと思います」、「演劇が介護や教育の現場で、こういうかたちで“役立つ”のだと思いました」、「老いるということへの想像が広がり、人の感情の問題を深く考えるきっかけとなった」、「認知症を切り口に、コミュニケーションの本質を体感できたように思いました」といった声が寄せられた。社会問題の解決手法としての演劇を紹介し、体験する機会を提供することで、参加者みずからが演劇の実践を通じて老いや介護、コミュニケーションなどの問題を考え、単なる娯楽に止まらない演劇の社会的有用性を提示することができた。

事業の実施にあたっては、新宿区文化観光課、新宿観光振興協会、新宿未来創造財団、新宿 EAST 推進協議会、新宿文化ネット、新宿フィールドミュージアム、紀伊國屋書店などの新宿の観光振興と文化振興に関わる機関と連携することで、新宿から「国際演劇都市 TOKYO」を国内外に向けて広く発信することができた。演劇を使った街歩き・文化財での演劇公演・トークショー・ワークショップという体験の場を提供するとともに、中核館として地域連携の中心となり、「国際演劇都市 TOKYO」を強くアピールすることによって、都内の劇場や文化施設へと人の流れを誘導するハブ施設として、一定の機能を果たすことができた。

2. 地域の子どもたちに演劇文化を継承し次世代の担い手を育成する人材育成事業

(1) 子ども向け演劇ワークショップを通じた演劇人育成プロジェクト

「エンパク★子ども演劇教室 2018 演じるってなんだろう？」では、世界的に著名な劇作家・演出家であり、全国で演劇教育や演劇ワークショップの講座を受け持つ平田オリザ氏を講師に迎え、小学校高学年から中学生を対象としたワークショップを開催した。定員 30 名の募集に対して 64 名の応募があり、当日は 26 名が参加した。演劇未経験者も含めいくつかのグループに分かれて、それぞれが 3 日間で 10 分程度の短い作品を作り上げる。最終日には早稲田小劇場どらま館という本物の劇場で上演を行なった。短い時間で、学年もバラバラのグループにおける創作は、新しい仲間と集団で何かをすることの難しさと、共働の方法を学習するのに極めて有効な手段として機能した。発表会終了後に実施したアンケートでは、「友だちが増えた」、「初対面の人と仲良くなれた」など、年齢の異

なる新しい仲間との出会いを前向きに捉える感想があった。また、「劇の作り方がわかった」、「演じることについての考えが変わった」など、演劇の知識や技術を習得し、演劇の楽しさを十分に体感できる講座となった。ほかにも、「みんなで台本を考えたことがなかったのが難しかったが、すごく楽しかった」など、こどもたちの豊かな感性や情操、知的好奇心を刺激し、主体的・対話的で深い学びの力を育むことができた。さらに、保護者からも、「目がキラキラしていた」、「自分から意見を言っている場面を見たのが意外だった」など、自分の子どもの意外な一面を発見する絶好の機会となった。また、昨年度実施して大きな反響のあった同イベントを継承・発展させた今年度は、こどもたちや保護者の感想や参加後の変化についてヒアリングした内容を、ワークショップの具体的な実施内容とともにイベントレポートとしてホームページ上などで公開することで、取り組みの様子や成果を広く発信し、演劇ワークショップの認知度向上を図るとともに、こども向けワークショップにおけるモデル事業としての役割を果たすことができた。

(2) アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の伝統芸能鑑賞支援活動

障がい者を中心とする児童・生徒への伝統芸能鑑賞活動支援事業では、都立特別支援学校5校に講師を派遣し、544名を対象に出張ワークショップを行った。いずれも狂言・常磐津の第一線で活躍する演者を直接学校に派遣することで、観劇の機会が限られた特別支援学校の生徒たちに至近距離で生の演技・演奏を披露することができた。知識がないこども、特に障がいをもったこどもたちに伝統芸能は難しいとされるが、過去10年間にわたって取組を続けてきたノウハウに加え、出張先学校との連携を密にし、生徒たちの理解度や関心に対応したプログラムとすることで、生徒たちに芸のおもしろさを十分に理解してもらうことができた。今回、常磐津教室を実施した、声を発することができない児童が多い学校では、音当てクイズの回答に、イラストボードを用いて、選択で回答する方式を採用した。雪や蜘蛛、蝶々の曲にあわせて紙の雪を降らせてみる、蜘蛛の巣テープを投げる、紙の蝶々を扇いで舞っているように見せるなど、歌舞伎の小道具を使つての実演のたびに、児童たちからは「わ〜〜」という大きな歓声が上がった。生徒からはさまざまな答えが寄せられ、可愛い絵も相まって、理解が深まったものと思われる。最初は堅かった表情も徐々に和らぎ、机や手をたたいて喜ぶ様子が印象に残った。児童たちは終わってからも、「笑い」のフレーズを歌い、「おもしろかった」と余韻を楽しんでいる声も多く聞こえてきた。また、狂言教室を実施した学校では、能舞台の再現にチャレンジしてもらった。舞台の細部まで再現することは今後の課題として、今回は正面舞台に描かれている「老松」を、児童・生徒が各学校で絵を描く、色紙で散りばめるなどの工夫を凝らして作成、能舞台の再現に取り組んでももらった。鑑賞するだけでなく、能舞台の一部を自分たちの手で作り上げる、というまた異なったアプローチを取り入れることで、児童・生徒の理解が深まったものと思われる。それぞれの学校に描かれた松の絵からは、参加することへの喜びが伝わってくるようで、実施校の教員からも「老松制作に参加できたことを誇りに思っている」との感想をいただいた。本事業は、伝統芸能の単なる鑑賞の場としてだけでなく、それぞれの生徒・児童の感性を豊かにし、表現力を身に着けるという意味においても、社会的意義のある活動だといえるだろう。

事業の実施にあたっては、新宿区教育委員会や近隣の小・中・高等学校、特に「出張体験教室」においては、各学校の担当者、特別支援教育を専門とする研究者（本学教員）と連携した。また、本事業の認知度を高め、今後の取組みへの理解と関心が深まるよう、大学の広報媒体はもちろん、新宿区や新宿文化ネット、新宿稲門会などの組織広報を活用し、

実施報告を継続的に行ったことで、さまざまな方面からの問い合わせや反響があった。

3. グローバル化拠点としての演劇博物館の国際発信事業

(1) 展示解説の多言語化事業

本事業では、海外からの来館者に当館の展示をより楽しんでもらうとともに、日本の演劇・映像文化への理解と関心を高めるために、英語・中国語・韓国語による多言語対応に取り組んだ。演劇博物館では、これまでも展示パネル・タッチパネルの設置、ハンドアウトの作成・配布、館員による多言語ツアーなど、演劇・映像文化の魅力をさまざまな形で広く国内外に向けてアピールしてきた。その経験を踏まえ、今年度は主に多言語ホームページの開設とQRコード配信システムの導入を行った。多言語ホームページの開設では、演劇博物館のイベント情報を積極的に発信するために、従来の演劇博物館の全体を紹介したホームページに加えて、秋季企画展「現代日本演劇のダイナミズム」（会期：2018年9月29日～2019年1月20日）、および特別展「演劇評論家 扇田昭彦の仕事―舞台に寄り添う言葉―」（会期：2018年10月6日～2019年1月20日）の開催情報を英語・中国語・韓国語に翻訳し、演劇博物館のホームページに掲載した。さらに、展覧会の期間中には、海外からの来館者に対して、現代日本演劇の豊かさと広がり、をより効率的かつ直接的に理解してもらえるよう、日本語解説パネルの横に、英語・中国語・韓国語の解説パネルにアクセスできるQRコードを設置した（合計45枚）。これによって、日本語話者ではない訪日外国人にも、手元のスマートフォンやタブレットを操作するだけで、展示品の解説テキストなどのコンテンツが簡単に視聴できる多言語解説サービスを実現した。演劇・映像文化を深く学べる場として、演劇博物館が外国人にとっての観光スポット・情報発信拠点となることで、「国際演劇都市 TOKYO」を国内外に向けて広くアピールするとともに、地域の文化活動や観光振興に貢献することができた。

(2) 海外の演劇博物館との知識・技術交流事業

本事業では、国際交流シンポジウム「クィアな記憶を発掘する―映像メディアとアーカイブの実践を通じて」を開催、定員200名の募集に対して、198名の応募があった。インフルエンザの時期と重なりキャンセルが相次いだ。当日は159名が参加し活発なシンポジウムとなった。演劇・映像関連の資料収集および展示の方法に関する知識共有を目的としたシンポジウムに、ジェンダーとセクシュアリティの観点を加えることで幅広い層へのアピールに成功したといえよう。当日の登壇者と発表タイトルは以下の通り。ストゥ・マダックス（GLBT歴史協会評議員）「私たちの物語をつなぎとめる―過去の私的映像を用いて現在の私的物語を守る」、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ（京都大学大学院文学研究科教授）「Boys' Loveの行方から考える：日本におけるアーカイビングの問題点」、久保豊（早稲田大学演劇博物館助教）「クィアな過去を求めて―演劇博物館をクルージングする」。各登壇者の発表では、性的マイノリティに関連する映像資料のアーカイビングの実践と現状に関して専門性の高い内容が展開されたが、初学者でも分かりやすい表現を用いて来場者の理解度をあげることで、発表後の質疑応答でも建設的な議論へと発展させることができた。来場者からのアンケートには、「LGBTの資料が廃棄されてきたという現実を知るとともに、それを守るために活動している人がいるという現状を知ることができた」、「ホームムービーという映像についての知見を得られたこと、またそれがクィアな人々・文化の日常・普通を記録していた限りなく貴重な資料になるのだということ、二重三重に興奮いたしました」、「一言では表せないくらいたくさんの視点を知れた」、「こういう企画をカジュアルにやる事は素晴らしいです」といった感想が寄せられた。大学内

の博物館がジェンダーとセクシュアリティをテーマに国際シンポジウムを開催することは極めて稀である。そのため、演劇・映像研究を牽引してきた演劇博物館が本イベントを開催することは、演劇・映像文化の歴史のなかで不可視とされてきた性的マイノリティの記憶を発掘し、アーカイブする必要性を発信する試みとして、この分野にこれまで詳しくなかった人々にも、それぞれの観点から問題提起を行ってもらう機会の創出に貢献した。博物館・美術館関係者だけでなく多様な来場者層に恵まれ、「このような挑戦的な取り組みを今後も続けてくださると良いなと思いました」、「このようなコラボや国際シンポジウムが多く開催されれば嬉しい」など、国際シンポジウムの継続を求める意見が多く寄せられた。

事業の実施にあたっては、新宿区、新宿未来創造財団、新宿観光振興協会などの自治体、および新宿文化ネット、新宿研究会といった地域密着型の機関の情報網や窓口を活用し、幅広い層に向けて継続的な広報活動を実施した。また、地元の南門通り商店街、早稲田大学OBが集う早稲田稲門会などにも協力を呼びかけ、特に地域に暮らす外国人が気軽に足を運び、コミュニティー・スポットとして活用できるよう工夫するとともに、都内の美術館、博物館、映像アーカイブ施設などにおいてポスターの掲示、チラシの配布を行うことにより、普段から映像メディアやアーカイブに関心の高い人々に向けて情報を発信した。さらに、ジェンダーやセクシュアリティに関心の高い学生や研究者も対象に、日本語と英語でSNSを用いて積極的な広報を行った。グローバル化拠点として海外からの来館者に向けて、日本の演劇・映像文化の普及・振興を促進するとともに、演劇・映像文化のアーカイビングを中核に置いた国内外のネットワークの形成に貢献することができた。

4. 多様な演劇文化の普及を目的としたユニークベニューとしての演劇博物館促進事業

(1) ユニークベニューとしての演劇博物館活用プロジェクト

本事業の野外映画上映会「エンパクシネマ vol.2」には、200席の座席数に対して、立ち見を含め573名の来場があった。来場者が昨年度より170名以上も増えたのは、昨年度の映画上映会が好評を得たこととSNSでの積極的な広報の結果であろう。当日は、2名の活動写真弁士（澤登翠、山城秀之）による解説とピアニスト（柳下美恵）の伴奏付きで以下の作品を上映した。『ラリーのスピーディ』（制作年詳細不明）、『日の丸太郎・武者修行の巻』（1936年）、『血煙高田の馬場』（1928年）、『虚栄は地獄』（1924年）、『子宝騒動』（1935年）。今年度は、すべての作品を16ミリ映画フィルムで上映することで、作品と弁士・ピアニストのパフォーマンスの鑑賞のみならず、映写の様子も映画文化の一部として観客が体験できる環境を提供できた。来場者からのアンケートには、「初めて無声映画を弁士さん・演奏付きで拝見しました。臨場感があり、周りの観客の笑い声で一体感も感じられて素晴らしい空間でした」、「このような古い映画が保存されているだけでなく、上映会ができるほどの状態であることに驚いた。これらは日本文化の一つとして将来にまでぜひとも保存を永久につづけてもらいたいです」、「無声でも、このような形で観ることは今現在数少ないため貴重な経験になりました」、「この屋外空間を利用した企画をこれからも続けて観たいです」といった多くの声が寄せられた。演劇博物館前舞台をスクリーンとして最大限活用する催しを通して、日本独自の無声映画文化の面白さを発信できただけでなく、映画フィルムでの上映および生伴奏付きの弁士解説を間近で体験してもらうことで、幅広い世代の来場者に無声映画文化を楽しみながら、弁士・映写技術の継承と映画保存の重要性を考える機会を提供することに成功した。弁士の解説・ピアノ伴奏付きの無声映画の楽しさを幅広い世代に向けて発信できただけでなく、映画上映機

材や映画フィルムを保存することの重要性および映写技術や弁士文化の面白さを学生や子ども連れの家族を含む老若男女が多く集い、「ぜひ来年もエンパクシネマを!」、「年一回といわず、年二回～四回ほど同イベントを開催していただけると嬉しいです」など、同イベントの継続した開催を期待する高評価を得ることができた。

(2) 若年層のための伝統文化継承プロジェクト

本事業の落語会「日本演芸若手研精会 in 早稲田」には、定員 300 名の募集に対して、782 名の応募があり、当日は当選者の中から 254 名が参加した。応募者が昨年度より 200 名以上も増えたのは、この落語会が地域の人びとに定着してきた結果であろう。当日の演者と演目は以下の通り。春風亭きいち「真田小僧」、柳亭市楽「粗忽の使者」、入船亭遊京「七度狐」、古今亭志ん吉「熊の皮」(仲入り)、三遊亭わん丈「お見立て」、柳亭市童「夢金」。今年度は、一昨年度、昨年度から出演者を一新したが、各々の演者がそれぞれの持ち味を存分に発揮し、過去二年に負けず劣らずの熱気溢れる落語会となった。来場者からのアンケートには、「普段敷居が高いと思い込んでいたものを、学内で、しかも無料で開催してもらえるのは学生にとって本当にありがたい。足を運ぶたびに、目が肥えていく気がします」、「初めての落語でしたが、とても楽しめました。きっかけとしてとてもよかったです。自分でも行ってみようと思います」、「このような古典芸能の公演は毎年開催してほしい。このような場で興味をもった若者たちが、寄席や劇場に足を運んでくれるのだと思う」といった声が寄せられ、落語の魅力を広く発信するだけでなく、演劇博物館の催しを通して、これまで古典芸能に興味のなかった人々にも、古典芸能をより身近に感じてもらえるような“きっかけ”の創出に成功した。学生をはじめとする若者も多く集まり、「来年、再来年と、さらに継続しての開催してほしい」、「是非今後も毎年続けてください」など、継続しての開催を望む声も多数寄せられた。

事業の実施に当たっては、紀伊國屋ホール、東京芸術劇場、文京シビックホール、新宿末広亭、池袋演芸場などの都内の劇場や映画館、寄席においてポスターの掲示、チラシの配布を行うことによって、普段から演劇・映像文化に関心の高い人々に向けて情報を発信すると同時に、新宿未来創造財団、新宿フィールドミュージアム、としま未来文化財団、国立映画アーカイブの協力を得て、地域の住民に向けても積極的、継続的な広報活動を実施した。さらに、地域の文化ボランティアや学生ボランティアと協力して事業を開催することで、地域とのより緊密な共働を実現し、学生などの若い世代や地域住民への伝統文化の普及・振興に大きく貢献するとともに、ユニークベニューとしての演劇博物館や大隈記念講堂を活用することによって、演劇・映像文化による地域コミュニティの形成を促進することができた。

【事業実績】

1. 「演劇の街・新宿」振興事業

(1) 演劇による地域の観光資源活用プロジェクト

①『演劇クエスト 花の東京大脱走編』

配布期間:2018年10月25日(木)～2019年1月31日(木)

配布場所:早稲田大学演劇博物館

総合演出・編集・執筆:藤原ちから(BricolaQ)

執筆:コジママサコ(クロひげ)、住吉山実里、高野ゆらこ、横井貴子

リサーチ:富田粥

イラスト・地図・表紙デザイン・リサーチ協力:進士遥

制作:橋本麻希

②ゲッコーパーレード出張公演 家を渉る劇 vol.3『リンドバークたちの飛行』

日時:2018年10月17日(水)14:00～、17:00～、19:30～(3回公演・各回60分)

会場:早稲田大学演劇博物館

作:B.ブレヒト 訳:岩淵達治

演出:黒田瑞仁、柴田彩芳、本間志穂、渡辺瑞帆(青年団)、市松(砂と水玉)、
古賀彰吾(劇団ドクトペッパズ)

出演:河原舞、崎田ゆかり、山本瑛子

衣装:YUMIKA MORI

照明:鈴木麻友

企画:本橋仁、黒田瑞仁、渡辺瑞帆

(2)演劇文化発信プロジェクト

①岩松了×風間杜夫×坂井真紀トークショー「逃げる劇作家、岩松了を追いかけて。」

日時:2018年12月11日(火)18:30～20:00(17:30開場)

会場:早稲田大学大隈記念講堂大講堂

登壇者:岩松了、風間杜夫、坂井真紀

司会:徳永京子

(3)演劇で社会問題を考えるプロジェクト

①老いと演劇のワークショップ

日時:2019年1月12日(土)14:00～17:30(13:30開場)

会場:早稲田大学3号館7階702教室

講師:菅原直樹(俳優、介護福祉士)

2. 地域の子どもたちに演劇文化を継承し次世代の担い手を育成する人材育成事業

(1)子ども向け演劇ワークショップを通じた演劇人育成プロジェクト

①エンパク★子ども演劇教室2018 演じるってなんだろう?

日時:2018年8月8日(水)～8月10日(金)各日10:00-17:00

会場:早稲田大学構内、早稲田小劇場どらま館

講師:平田オリザ

対象:小学校5年生/6年生、中学校1年生/2年生/3年

(2)アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の伝統芸能鑑賞支援活動

■東京都立墨田特別支援学校 10月24日(2コマ)<狂言教室>

講師:善竹十郎(狂言師)、善竹大二郎(狂言師)

参加者:128名(高校1～3年生/知的障がい)

■東京都立田園調布特別支援学校 11月20日(1コマ)<常磐津教室>

講師:常磐津和英太夫(太夫)、常磐津菊与志郎(三味線方)

参加者:109名(高校1～3年生/知的障がい)

■東京都立永福学園 11月30日(1コマ)<常磐津教室>

講師:常磐津和英太夫(太夫)、常磐津菊与志郎(三味線方)

参加者:50名(小学3年～6年生、中学1～3年生・肢体不自由)

■東京都立水元小合学園 2019年1月9日(2コマ)<狂言教室>

講師:善竹十郎(狂言師)、善竹大二郎(狂言師)

参加者:177名(中学1~3年生・高校1~2年、知的障がい・肢体不自由)

■東京都立大泉特別支援学校 2019年2月1日(1コマ)<狂言教室>

講師:善竹十郎(狂言師)、善竹大二郎(狂言師)

参加者:80名(小学~高校生・肢体不自由)

3. グローバル化拠点としての演劇博物館の国際発信事業

(1) 展示解説の多言語化事業

ホームページとQRコード配信システムによる多言語の展示解説を実施。対象となった展示は以下の通り。

①企画展「現代日本演劇のダイナミズム」(会期:2018年9月29日~2019年1月20日)

・多言語QRコードパネル合計:39枚

・多言語ホームページの開設

②特別展「演劇評論家 扇田昭彦の仕事ー舞台に寄り添う言葉ー」

(会期:2018年10月6日~2019年1月20日)

・多言語QRコードパネル合計:6枚

・多言語ホームページの開設

(2) 海外の演劇博物館との知識・技術交流事業

国際交流シンポジウム「クリアな記憶を発掘するー映像メディアとアーカイブの実践を通じて」

日時:2019年1月18日(金)17:00~19:30

会場:早稲田大学小野記念講堂

登壇者:ストゥ・マダックス(GLBT歴史協会評議員・映画監督)、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ(京都大学大学院文学研究科教授)、久保豊(早稲田大学演劇博物館助教)

司会:久保豊(早稲田大学演劇博物館助教)

協力:GLBT歴史博物館、京都大学

4. 多様な演劇文化の普及を目的としたユニークベニューとしての演劇博物館促進事業

(1) ユニークベニューとしての演劇博物館活用プロジェクト

「エンパクシネマ Vol.2」

日時:2018年10月8日(月・祝)18:30-20:30

会場:早稲田大学演劇博物館前舞台

出演:澤登翠(活動写真弁士)、山城秀之(活動写真弁士)、柳下美恵(ピアノ)

協力:マツダ映画社、鈴木映画

(2) 若年層のための伝統文化継承プロジェクト

落語会「日本演芸若手研精会 in 早稲田」

日時:2018年11月27日(火)18:30-20:50

会場:早稲田大学大隈記念講堂小講堂

出演:柳亭市楽、古今亭志ん吉、柳亭市童、入船亭遊京、三遊亭わん丈、春風亭きいち

協力:株式会社オフィスエムズ